

# 魅力染まる「菊炭」トート

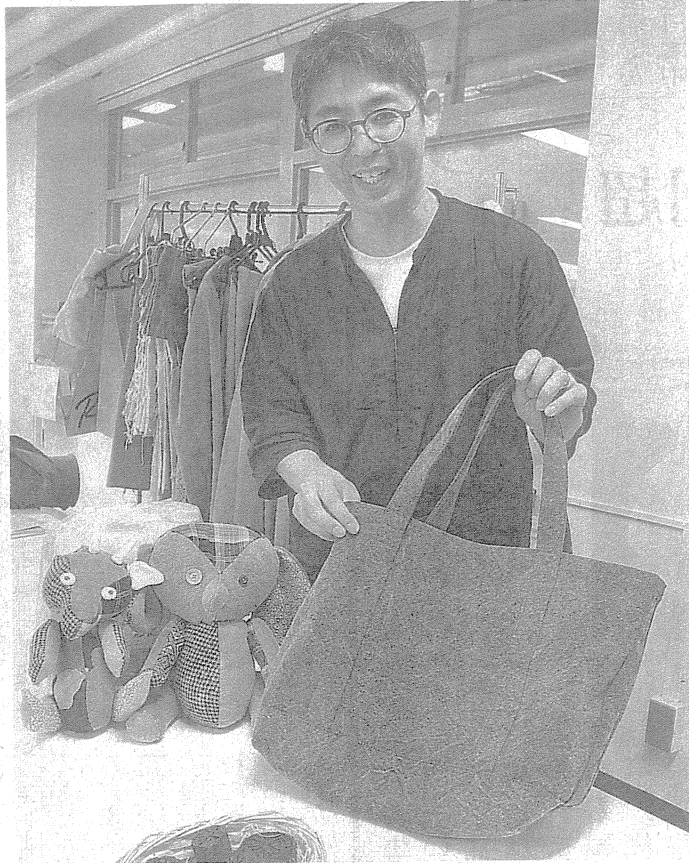
## 大阪の短大生ら開発

### 川西の特産品 染料へ変身

川西市特産の「一庫炭」の裁断片を利用して染色したトートバッグが完成し、市のふるさと納税の返礼品に採用された。大阪成蹊短大（大阪市東淀川区）の生活デザイン学科の学生らが開発に関わり、温かみのあるグレーに仕上がっている。

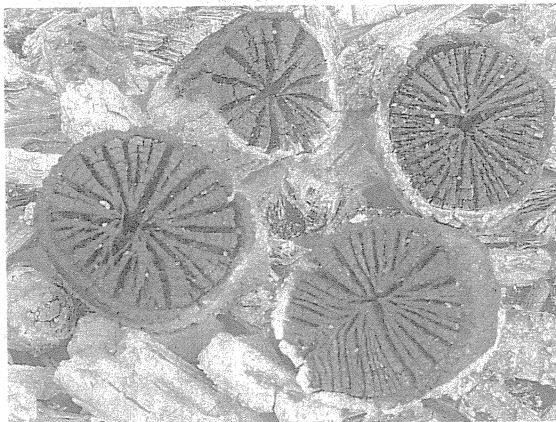
（高部真一）

一庫炭は、川西市北部の黒川地区の伝統産業で、火持ちがよく、煙がほとんど出ないことから茶道用に重宝される。断面が菊の花びらのように見えることから「菊炭」とも呼ばれる。現在、今西さん（54）の一家だけが生産に当たっている。同短大の伊東義輝教授（52）（川西市在住）が小学生だった長男の自由研究で、炭の材料として伐採と芽生えを繰り返し太く成長した「台場クヌギ」の分布を一緒に調べている際、一



### 市返礼品に採用

庫炭の存在を知った。今西さんや同地区の活性化を目指す市と、産官学連携で新たな特産品ができないかと模索を始めた。2022年から授業の一環で、同学科の学生約10人が毎年、黒川地区でフィールドワークをしながら、炭を切りそろえる際に出る破片を再利用する方法を考えてきた。当初はすり鉢で細かくして自力で染料をつくって布を染めていたが、商品化にはプロの技術が必要と、和歌山市の業者に微細に粉碎してもらい染料を作製した。その染料で染めた生地でジャケットやスカート、コート、ぬいぐるみなどを



●完成したトートバッグを手にする伊東教授（大阪市東淀川区） ●断面が菊の花びらのようになる一庫炭（川西市で）

作り、25年3月には川西市内で展示会を開いた。

その後、市のふるさと納税の返礼品にこの話が持ち上がり、岡山県玉野市の工房で厚手のキヤンパス地を染めてもらい、多くの人に使うてもらえるトートバッグにすることにした。「色を濃くめに」「持ち手は肩にかけるようにしたほうがいい」など学生らのアイデアを取り入れながら、仕上げた。バッグの大きさは高さ30センチ、幅33センチ、奥行き16センチ。市外の人が川西市に1万9000円の寄付をすると、返礼品として贈られる。

伊東教授は「学外で社会との関わりを持ちながら、菊炭の新しい恵みを生み出すことができ、学生たちにとって、いい経験になった」と教育効果を語り、「菊炭100%の環境に優しい天然の染料は赤みを帯びたグレーで、経年で風合いの変化を楽しめる」と、今後、雑貨を作ったり、絵の具にしたりする展開も考えている。

今西さんは「バッグにしつかりと色がのり、いい感じになった。炭には消臭や紫外線カットの効果もあるとされ、新たな魅力が広がってくれば」と期待する。

経験者対象 取材記者募集  
エリア採用も実施



食と遊  
日頃の...

子どもの  
い食の遊び  
ついて考え  
災×食×あ  
阪神西宮駅

光学技術研究チームを束ね

たい  
習和歌